豊川市の復興

豊川市は、昭和18（1943）年6月1日に3町1村が合併し誕生しましたが、工廠の建設が豊川市誕生の契機であったことから、工廠の壊滅そして解散は大きな影響を与えました。人口は半減し、市政を支える財源も不足し、工廠という核を失った豊川市は市政そのもののあり方が大きく揺れました。しかしこのような状況の中、市政を維持できた要因として工廠の遺産を活用したことがあげられます。工廠本体は空襲により壊滅的な被害を受けましたが、周辺には工員寄宿舎などの関連施設が残されていました。これらの施設は各種学校や公的住宅、市役所として利用され、結果として市政を維持する一助となりました。それでも昭和30年代を通じて財政措置は県の管理下に置かれるほど厳しい状況にありましたが、昭和32（1957）年に制定された工場誘致条例により、工廠跡地は平和産業の工場群としてよみがえり、内陸工業都市として復興を果たしてきました。その後も都市基盤の整備が進められ、かつての工廠の街は平和な都市として姿を変えています。

旧体育館建設工事と工場進出により復興が進む工廠跡地
（昭和37年頃）

工廠跡地に進出した工場群